

創刊の辞

所長 柊 暁 生

「はじめに言葉があった」(ヨハネ 1 章 1 節)

ヨハネ福音書はじめの「言葉」はギリシア語のロゴス (logos) を翻訳したものである。ロゴスは言論、論理、理性、割合、比例などの意味を持つ理性的な言葉である。「ことわり」の意味を合わせ持つ「ことば」である。

ところで、ヘブライ語で「言葉」をあらわす代表的な単語にダバル (dabar) がある。ダバルは言葉と出来事の両方の意味を表現する。言葉と事は切り離すことができないからである。「できごと」の意味を合わせ持つ「ことば」である。

旧約聖書のダバルは、多くの場合ギリシア語訳聖書でロゴスと訳されている。ヨハネ福音書冒頭の「言葉＝ロゴス」のヘレニズム的思考の背後には、「言葉＝ダバル」のユダヤ的思想が含まれていると見てよいであろう。日本語の「ことば」が「こと」にかかわるとすれば「意と事と言とはみな相称へる物」(宣長) —, 「はじめに言葉があった」という翻訳には重層的な言葉の文化的背景があると言えるだろう。

「そして言葉は肉体となった」(ヨハネ 1 章 14 節)

言葉であるキリストは肉体を取る。キリスト教もまたその成長過程において文化的な肉体を取ってゆく。言葉は人々の血となり、肉となり、文化を形成する。キリスト教文化はある意味において言葉の受肉 (incarnation) である。

司教ウルフイラはギリシア語とラテン語のアルファベット及びゴートのルーネ文字をもとに新しい文字をつくり、ゴート人のために聖書を翻訳する。修道士メシュロプはアルメニア文字を考案し、アルメニア語の聖書を翻訳する。キリルとメトディウスの兄弟はキリル文字、グラゴール文字をつくり、スラヴ人のために聖書を翻訳する。

言葉は文字という肉体を取り、文化を形成する。はじめに言葉があり、そして言葉は文字となった。キリスト教文化の研究は言葉から肉体への問題に大きくかかわるのではなかろうか。